http://www.chunichi.co.jp/earthquake/　毎月1日は東海地震特集

備える その59「ひずみ集中帯」

新潟―神戸　中部も範囲

大地震 休みなし

内陸型「活動期」入る？

「一度起きた」は安心できず

新潟県に再び大きな揺れを引き起こした中越沖地震。二〇〇四年の中越地震の記憶も消えないうちの内陸型地震の連続は、いずれ海溝型の東海地震が起きるこの地方にも大きな衝撃をもたらした。中越、中越沖地震の震源地は最近分かった「ひずみ集中帯」に位置していて、この帯は滋賀、岐阜県や三重県北部にもかかっている。日本海沿岸の巨大地震は人ごとではないのだ。（社会部・加藤寛太）

「ひずみ集中帯では、過去に大きな地震がたびたび起きており、今後も起きる可能性が高い」と、名古屋大環境学研究科付属地震火山・防災研究センターの田所敬一准教授は指摘する。

一九九五年の阪神・淡路大震災以降、衛星利用測位システム（GPS）による観測網が充実し、日本列島がどのように変形しているかが、詳しく分かるようになった。その結果、新潟から神戸にかけた地域に地震を引き起こすエネルギーとなる「ひずみ」がたまっていることが数年前に判明、「新潟―神戸ひずみ集中帯」と呼ばれるようになった。

日本列島が乗っている大陸側のプレートに太平洋側からのプレートが沈み込むため、日本列島は絶えず東西からの圧力がかかる場所にあり、ひずみがたまると考えられている。

実際、ひずみ集中帯の中では、過去にはマグニチュード（M）7クラスの地震が相次いでいる。

一八四七年の長野の善光寺地震や一八九一年の濃尾地震、一九四八年の福井地震。最近は阪神・淡路大震災、二〇〇四年の中越地震、今回の中越沖地震がある。

「名古屋はひずみ集中帯の端に位置し、岐阜県や三重県北部もひずみ集中帯の中に入っている。この地域には活断層が多いこともあり、今回の中越沖地震のような大きな地震が今後起きる可能性がある」と言う。

一方、田所准教授は、百年から百五十年周期で起こり、今後発生が想定される南海トラフを震源とする東海や東南海、南海地震の海溝型地震の前後には、内陸で起こる大地震が増えることを歴史が証明している、とも指摘する。

古くは江戸時代の始まった直後の慶長南海地震（一六〇五年）の前には、山内一豊の子どもが死んだと伝えられている天正地震や、発生直後、謹慎中だった加藤清正がいち早く豊臣秀吉の元に駆け付けたという逸話が残る慶長伏見地震が起きている。

太平洋戦争の終戦前後に相次いで起きた昭和の東南海、南海地震の前には、濃尾地震や鳥取地震、三河地震などが起きている。

阪神・淡路大震災以後も、ここ十数年で鳥取県西部や中越、能登半島などに大きな地震が起きており東海、東南海地震前に内陸地震が活発に起きる「地震活動期」に入ったと考えられるという。

明暗分けた耐震化

被災した新潟県柏崎市に入った田所准教授は、「能登半島地震の被災地と同じような光景だ」と感じた。「隣に建っている新しそうな家は無事なのに、古い木造で瓦ぶきの家屋は、全壊している。建物の強度を保つことの重要性をあらためて訴えたい」と言う。筋交いを入れるとか、接合部に金物を入れる、間口を狭くする、軽い瓦に変えるなどの対策が必要と力説する。

名大災害対策室の木村玲欧助教は、地震発生時、二〇〇四年中越地震の復興調査のため、新潟市に滞在していた。直ちに県庁の災害対策本部に入り、アドバイスをしたり、本部の活動ぶりを調査したりした。木村助教は「発生後、知事以下、主要な幹部がそろった対策会議が開かれ、人員の配置や被害状況の把握など体制が整っていた。水、食料の配給、暑さ対策、要援護者対策など必要な対応を想定しながら準備を進めており、中越地震を経験した教訓が生かされていた」と話した。

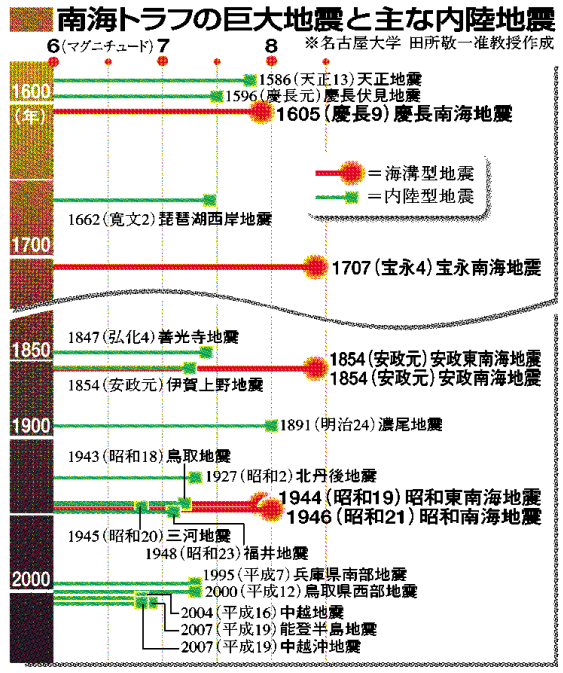
安藤雅孝名大名誉教授と同災害対策室の林能成助教は、地震翌日の七月十七日に柏崎市内に入り、主に被災者の聞き取り調査を行った。柏崎市は中越地震でも、震度5弱の揺れに見舞われたが、聞き取りを実施した市民の多くは、特段の地震対策を取っていなかったという。林助教は「一度大きな地震が起きたので、もう当面起きないだろうと判断したようだ」。「原発があるから、この地域は地震には安全だと思っていた」という声もあったという。

企業は教訓生かす

一方、全国展開しているコンビニエンスストアなどの店舗は、これまでの地震の教訓が生きていたという。電気や水道が止まっても、本部から自家発電機や仮設トイレ、地震時に需要が高くなる商品が届き、発生当日でも営業を続けていた。

林助教は「企業は全国ネット。数年に一度はどこかで地震を経験し、教訓が蓄積される。地震時になにをすべきかが明らかで、学んだことが比較的すぐ応用できる。一方で個人は、今度いつ地震に遭うかは全く分からず、家の耐震補強など『やるべきこと』の費用対効果を考えてしまうので対策が進まないのでは」と分析する。

田所准教授は「日本の国土の広さは世界全体のわずか0・25%しかないのに、M6以上の大きな地震の約二割が起きている。日本中どこも安全なところはないので、今回のような地震が自分のいる場所で起きたらということを考えて、備えてほしい」と訴える。



防災ボランティアの今

日本沼津災害救援ボランティアの会

（静岡県沼津市）

被災者の姿 次世代へ

「自主防災会員は手を挙げてください」。静岡県沼津市静浦地区で七月にあった会合で、事務局長の石川学さん(五七)が求めた。約百二十人のうち手を挙げた人はまばら。石川さんは「静岡県では全員が自主防災会員です」と苦笑しながら「わが身を守り、友を守りましょう」と呼び掛けた。

会の設立は一九九五年の阪神大震災がきっかけ。福祉ボランティアとして神戸へ駆けつけた石川さんは「（東海地震の懸念される）静岡だったら」と危機感を募らせ、同じく沼津から神戸にボランティアとして訪れていた故久保正太郎さんと二人で「災害から学ぶことが大切」と話し合った。

柔道場を開いていた久保さんが初代代表として知人らに参加を呼びかけて始まった活動の柱は、防災力の向上と救援だ。

「輪島の朝市で元気な人を見て逆に励まされた」（杉山竜紀君）。二人は三月の能登半島地震で被災した輪島市での経験を話した。

子どもを巻き込んだ活動は発足当初にさかのぼる。石川さんは「被災者との交流が大きな経験になるはず」と、子どもたちを連れて被災から約一年後の神戸を訪れた。

「生きていることはすばらしいこと。災害はそれを壊すと伝えたい」と言う。今も年に二回、一緒に神戸の被災者を回っている。合言葉は「いのちにまっすぐ」。心身に傷を負って生きる被災者の姿に触れて自分を見つめてもらうのが狙いだ。

一年の広島芸予地震からは救援活動にも参加してもらうようになった。

こうした活動の背景には「防災の伝承は難しい」との思いがある。石川さんは継続して被災地を訪れ「被災者はつらいことを思い出したくない。でも次の時代の人が同じ目に遭ってほしくない気持ちもある」と感じるようになった。

災害を伝える活動の一方で、消防と連携して「自らの命は自ら守る」ための救命講習を地元の学校などで続けている。もちろん災害弱者の高齢者や子どもも一緒だ。最終的には防災を通して家族について考えてもらいたいと思っている。（東海本社報道部・中崎裕）

地域住民に能登での経験を報告する石川さん㊨と中学生＝静岡県沼津市で

能登半島発 ▶③◀

巻き返し策 暗礁乗り上げ

輪島・城兼旅館

輪島市の日本海を望む大野海岸通り。切り立つ山肌に三階建ての城兼（しろがね）旅館は建つ。

七月二十一日に訪ねたが、夏休み最初の土曜らしいにぎわいはなかった。十五部屋に四十五人ほどが泊まれるのに宿泊客は一人もいない。主人の板谷進さん(七二)は「今年はもう駄目。あきらめましたわ」と苦笑いを浮かべた。

景気回復の兆しが見えた今年は巻き返しを狙っていた。息子の秀次さん(四〇)の提案で海側の二部屋に露天風呂を作り、客を呼ぶ目玉にするつもりだった。地震では部屋の壁が落ちたり、玄関の天井に亀裂が入ったりした。風呂のお湯を通す配管も壊れた。再開までちょうど二カ月かかり、風呂の改修費用は三千万円に膨れ上がった。

地震後の客足は昨年の半分、八〇年代のピーク時の四分の一に落ち込んだ。忙しい時に手伝ってもらっていたパートの人たちを呼ぶのをやめて経費を切りつめ、苦境をしのいでいる。

七月十六日の新潟県中越沖地震の影響が出るおそれもある。宿泊客は長野県や北関東の客らが多い。キャンセルはまだないが、地震の後に長野県の予約客から「そちらまで行けるでしょうか」と問い合わせが入ったという。心配は続く。（七尾支局・寺本康弘）

歴史的建造物 細心の修繕

七尾・渡月庵

屋根瓦の修繕が続く「渡月庵」＝石川県七尾市で

石川県七尾市の和倉温泉。高層の旅館が並ぶ温泉街の中心に木造二階建ての旅館がひっそりとたたずむ。「渡月庵（とげつあん）」は一九一五（大正四）年に建てられ、和倉温泉に現存する旅館の建物としては最も古い。「昔の和倉の面影があるところはうち以外はもうない。不幸中の幸いでした」。帽子山定雄社長(五九)は胸をなで下ろす。数寄屋造りの本体は無事で、地震後一週間ほどで営業再開にこぎつけた。

だが壁は落ち、屋根瓦はずれた。地震から四カ月が過ぎた今も建物の周囲は鉄パイプの足場で囲まれ瓦屋根の修繕が続いている。歴史的な建物だけに細心の注意を払う。費用と時間がかさむ。

帽子山社長が経営するもう一軒の宝仙閣は被害はなかった。二軒合わせた部屋数は三十四室。復旧工事の人たちが利用した四月は昨年の約80%。その後も五月70%、六月85%と前年割れが続くものの、回復傾向にあることが姿勢を前向きにさせる。「客がまた来たいと思ってくれるよう、今はサービス向上に努めます」と帽子山社長は言う。

能登半島地震から四カ月になり、観光客は少しずつ復興が進む被災地へと足を向け始めた。一時は前年の三、四割まで落ち込んだ宿泊客数が、七尾市の和倉温泉では八割、輪島市内では七割まで回復した。ただ、順調にみえる回復も一律ではない。

© 中日新聞社　無断転載、複製、頒布は著作権法により禁止されています。